

アンドロイドは電気羊の夢を見るか? ①

「これで測定するのは一」と、リックは導線のついた小さな接着用円盤を上にかざして、「顔面毛細血管の拡張度だよ。一時的自律神経反応といわれるものの一つで、平たくいえば、道徳的にショッキングな質問に対して起る、『恥』とか『赤面』の反射運動だ。これは、皮膚の電導率とか、呼吸とか、脈拍数とかとちがって、意志で制御できない」……「そして、アンドロイドにはそれが無いわけね」とレイチェル。

——フィリップ・K・ディック『アンドロイドは電気羊の夢を見るか?』

屈強な白髪の男性が、狭い古びたビルの階段を駆け上がって行く。どうやら、逃げ惑う相手を追い詰めているようだ。ビルの屋上まで追い詰められた相手の男は、反撃を試みるが軽くかわされて真逆さまに地上へ落ちていく。

*

30年以上前に、ハリソン・フォード主演で公開された映画『ブレードランナー』のクライマックスシーンである。昨年、続編が公開されて大きな話題になったが、このシーンはフィリップ・K・ディックのSF小説、『アンドロイドは電気羊の夢を見るか?』を原作にした旧作のものである。

追われているのは、本来この白髪の男を狙っていた賞金稼ぎの男（映画のなかでは、ハリソン・フォード演じるリック・デッカー）であり、彼は白髪の男の仲間たちをすでに何人も倒している。白髪の男の仲間たちは、遺伝子工学によって開発されたアンドロイドであり、辺境の惑星の過酷な強制労働を逃れて地球に侵入してくる。彼らを見つけ出して、「処理する」のがブレードランナーの仕事だ。

金属のボディを持った、古いイメージのアンドロイドとは違って、細胞を人工培養することによって作られたクローン人間としてのアンドロイド（映画では「レプリカント」と呼ばれる）たちは、過酷な労働条件に耐えるために肉体を強化されているが、基本的に普通の人間と変わりはない。ただ、最初から成長した肉体を持って生まれるレプリカントたちの寿命は極めて短く、記憶や感情が芽生える前に、労働に明け暮れる彼らの人生は終わりを告げる。映画の原作では、培養された細胞の寿命は4年程度ということになっていた。

とはいえ、人造人間と一般の人間にほとんど違いはなく、手配中の相手が人間なのか、人造人間なのかを見極めるのは極めて難しい。そこで、「フォークト＝キャンプ感情移入度測定法」と呼ばれる能力テストが行われる。

*

知性においても、肉体においても人間と同じ（あるいは人間以上の）機能を有するアンドロイドたちは、どんな人間でも成長過程で身につけるような記憶や経験を欠いている。このためなのかどうか、理由は分からないが、アンドロイドたちは一般の人間に共有されている感情移入の能力を持たない。上記のテストは、感情移入による自律神経の反応をもとに、人間とアンドロイドを峻別する。とはいえ、物語には偽の記憶を植えつけ

られたアンドロイドも登場するので、個人の記憶や知識としての経験だけが、人間と人造人間を区分する要素とは考えられていないようである。

敢えて言うならば、進化の過程で遺伝子に書き込まれた経験が、共生を基盤とする人間という動物に、本能に近いレベルで感情移入という天与の能力をもたらすのである。映画の原作になった小説のなかで、作者はつぎのように語っている。

感情移入という現象は、草食動物か、でなければ肉食を打ちきっても生きていける雑食動物にかざられているのではないか……ヒトのような群居動物は、それ（感情移入）によって一段と高い生存因子を獲得する。一匹狼的なフクロウやコブラは、逆に破滅に近づくだろう。

人間型ロボットは、どうやら本質的に独居性の捕食動物らしい。（フィリップ・K・ディック『アンドロイドは電気羊の夢を見るか?』早川書房、昭和52年、40頁）

この一文のなかに、フィリップ・K・ディックのシニカルな現代社会批判を読み取るのは、きっと筆者だけではないだろう。原作に描かれる陰鬱な近未来社会では、人々の社会性や共同性は希薄になり、孤独な人間たちはアンドロイドのような強さや潔さとは、無縁の弱さをいつも曝けだしているからである。

映画以上に原作のなかでは、この奇妙な感情移入能力テストが重要な位置を占めており、「人間」と「人間ではない存在」の差異という問題が、極めてシニカルにクローズアップされている。映画と原作では物語の雰囲気はかなり違うが、どちらにおいても主人公にとって人間とアンドロイドの境界が曖昧になっていき、次第に「それ（アンドロイド）」を「処理する（殺す）」という行為が、主人公を苦しめていくことになる。

特撮技術や映像の美しさが評判になった映画ではあったが、原作も含めて「人間」とは何か、あるいは現在および未来の人類の行く末について、さまざまな問題を提起した名作として、深く人々の記憶に残る作品になった。

*

原作には描かれていない、この映画のクライマックスシーンで、ハリソン・フォード演じる主人公は、ビルの屋上から落ちていく。このとき、一瞬前まで死闘していた相手のアンドロイドが、転落する賞金稼ぎの手をつかんで屋上へ引き上げて命をたすける。しかし、次の瞬間にアンドロイドの寿命が尽きてしまう。

記憶と経験を持たず、感情移入をしないアンドロイドは、自らの身体細胞の使用期限が尽きれば死を迎える。彼ら（それら）にとっては、「死」は身体の使用期限であり、ほぼ正確に予測できる決定事項なのである。しかし、人間にとって「死」は決して予測できない運命であり、ビルの屋上から落下しつつある人間にも「生」の可能性は残されている。

自らの生命の灯火が、予定通りに消えつつあるアンドロイドにとって、目の前のすべての生命が愛おしく感じられたのだろうか。なぜ、彼（それ）は憎むべき相手を最後に救ったのか。これからしばらく、この行動の意味について考えながら、「人間とは何か」という問いについて、少し違った角度から考えてみよう。